

ステンレス鋼について、電解法によつて得られたSol Ti量と鋼中の全C量より残さ中のC量を差引いた値より、 $\underline{\text{Ti}}$ と $\underline{\text{C}}$ の溶解度積 S を求め、絶対温度を T として、 $\log S = -7210/T + 3.19$ を得た。

文 献

- 1) 沢村, 津田: 鉄と鋼, 43(1957), p. 471
- 2) 若松: 鉄と鋼, 55(1969), p. 287
- 3) 成田, 宮本, 松本: 鉄と鋼, 57(1971), p. 68
- 4) 川村, 渡辺, 内田: 鉄と鋼, 57(1971), p. 94
- 5) 神森, 田口: 鉄と鋼, 57(1971), p. 158
- 6) 若松: 鉄と鋼, 57(1971), p. 656
- 7) K. BUNGARDT and G. LENNARTZ: Arch. Eisenhüttenw, 27(1956), p. 127
- 8) 瀬川, 島田: 鉄と鋼, 48(1962), p. 1679
- 9) A. BAUMEL: Arch. Eisenhüttenw, 34(1963), p. 135
- 10) 武井, 島田: 日本金属学会誌, 30(1966), p. 258
- 11) 学振第19委提出資料—No 8305, (1966)

「分析者への指針」

我々の鑄鍛鋼の製造も、他の多くの製造業と同じように、分析に始まり分析で終る。したがつて、正しい分析値が迅速に提供されることが一つの前提条件とさへ言へるが、現在の分析技術は日本学術振興会製鋼第19委員会第1分科会および鉄鋼協会鉄鋼分析部会などで数多くの研究が行なわれ、内外漢の私が注文をつける余地などない域に達していると言へよう。したがつて、ここでは研究管理者から見た分析作業についての感想といつたものをのべさせて戴く。

鑄鍛鋼を主体とする工場に所属する研究所で、分析室は製鋼作業および品質保証業務へのサービスも行なつており、その種の作業量の割合も高い。しかし、研究所の integrity という立場から見た場合、分析室を研究所から切離すことは考へられない。正しい分析値を追求する姿の中に研究の生命が秘められており、研究所の性格に対する分析室の無形の影響力は大きい。

機器分析の発達分析値の迅速な提供に大きな貢献をしているが、一方ではともすれば分析の基本を見失ひ勝ちとの嘆きも聞かれる。機器化は人事管理の面からは望ましいことであるが、一方では考へる習慣と手順を忘れさせる危険性があり、特に手作りの性格の強い鑄鍛鋼を扱う研究所では、管理者は十分留意すべきことであろう。

また分析担当者にも機器に使われてしまわずに、いつも新しいものを追求する姿勢を期待したい。

—(株)日本製鋼所室蘭製作所研究所所長 渡辺 十郎—